

## 帰省とは、命のルーツを 再確認する旅

4月からシリーズ化し始めた、私のささやかな「行脚体験記」を、拙くも書き綴って、『奈良県』は「長谷寺」までやって参りました。そして次なる目的地は、今回の行脚地の中で最も参拝しなかった場所の一つ、吉野山の『金峯山寺（金峯山修験本宗の国軸山総本山）』です。そして今月号は、ここ『金峯山寺』へと歩みを進めて行く予定でしたが、、『吉野山』という場所は大変霊験あらたかな土地で、行脚記をより深く体感して頂くためにも、どんな場所なのか土地の纏（まつ）わりを前知識として皆様にお伝えし、理解して頂かなければ旅の内容を進めることが出来ません。前編は『吉野山』についての説明、後編は旅の感動体験記と、2ヶ号に渡る特集になる為、今月号は1度「行脚記」をお休みして、八月のお盆にちなみ、『先祖供養は、自らの心を省み、その心の籠もった祈りでなければ意味がない』

という事について記したいと思いますので、どうか「行脚記」については、来月号の続編を心待ちにして下されば幸いです。

さて、と言う訳で、もうすぐお盆ですね！平素は何かと忙しく、年に1度の墓参り…と言う方も沢山おられる事でしょう。ご先祖様をご供養させて頂く、お墓参りは大切な事です。でも、お墓参りをして手を合わせたから「ハイおしまい」というものでもありません。つまり形だけのお墓参りでは意味がないという事です。やはり「心」が入っていないければなりませんね。

「お盆」、「お正月」あるいは、「ゴールデンウィーク」など、大型連休の時よく耳にするのが『帰省フッシュ』という言葉ですよね。しかしこの「帰省」とは、一体どういう意味なのでしょう？「ただの長期休暇！」くらいにしか思っていないならば、いつもの休日と何ら変わる事なく過ぎていきまします。「帰省」の語源は、「故郷に帰って親（父母）の安否を気遣う」という唐の詩人、朱慶余の漢詩によるものです。語源からも分かるように「お盆の帰省」というのは、親をはじめ、ご先祖様の孝行報恩のため、そして日頃の

「生かされている」事への感謝の念を新たにされる為の行事なのです。

親やご先祖様を想うという事は、自分の命のルーツを想うという事にもなり、自分の命の尊さを感じる事が出来るのではないのでしょうか？命の尊さを感じると言う事は同時に、自分の命に感謝することが出来るという事でもあります。また、自分の命に感謝することが出来たならば、自ずと親やご先祖様に感謝の念が湧いてくるはずですよ。

引いては、親戚や縁者、周囲の友達や近所の方々に感謝することが出来るという事にもなっていくのではないのでしょうか？そんな想いを懐いた人が、1人でも多く増えたならば、心の時代が望まれる日本国は、かつての人と人が協力し合い、感謝の念が溢れた、本当に素晴らしい精神大国に戻る事ができるものと思います。何はともあれ、「真心」が肝心という事でありませう。

頭では確かに、「真心」が大切というのは分かっていますが、私達は時間追われる日々の営みの中で、大切な何かを見過ごして生活しているのではないのでしょうか？多忙な日常がつくり出す騒々しい心、浮ついた心、がさついた心、自分の心がそういう状態にある

時というのは、どんなにありがたい出来事に遭遇していたとしても、そこにキラキラ輝く命を孕（はら）むことなく、自分の目の前を通り過ぎてしまふものです。

『心』というのは、『時間』と密接に関係している何かがある様な気が致します。そこで『時間』について考えてみようと思ひます。

読者の皆さんは、『ジャーネーの法則』というのをご存じでしょうか？これは、フランス哲学者ポール・ジャーネーが提唱した法則なのですが、年齢差によつて1年間の心理的長さが違つてくるというものです。1年間の心理的長さは、年齢分の1。つまり、歳を取れば取るほど1年間は短く感じるというのです。読者の皆様も、この感覚を経験としてお分かりになると思います。例えば、10歳の子供の1年間は、10年分の1です。それに対して、33歳の筆者は、33年分の1という事になり、人生を生きた時間の濃密さが違つたために1年という時間を感じる長さが違つたというのです。

また、物理的側面から見ると、1日は『24時間制』で、『グリニッジ

天文台（Greenwich time = イギリス・ロンドン東部）の世界標準時計を中心に時間は回っています。

ところで、日本が『24時間制』になったのは、明治21年と言ったら、せいぜい150年くらい前に決定した時間設定なのです。それまでは、日の出から日の入りまで、6つの時間に分けて過ごしていた様です。同時に夜の長さも六等分しているので、夏の時間と冬の時間では全然違う時間を、自然の流れと共に過ごしていたのです。そういう意味で、日本人の生活は明治時代に一変したと言えましょう。政府が、西洋と同じ24時間制を導入した事で、全ては時計の時間を中心に回り始めます。それは同時に**心の時間を無視**することになりました。つまり、24時間制は「分」や「秒」に細かく刻まれる事により、私達は心の時間を無視し、利便性の追求にアクセクするようになったのです。1人1人の進むスピードが違うのに、均質に時間を感じてしまうという事は、見方を変えれば、人と人が触れ合う**一期一会的な時間の感覚を奪っている**という事になります。今日も明日も

違う1日なのに、全く同じ24時間という時間の中で、私達は生きる事を強いられているのです。この様に、現代を生きる私達にとって、心と時間が密接に関係している事は否めません。心の時代と言われて久しいですが、そんな人間の「心」ほど扱いにくくて、それでいて何よりも大切なものはありません。心の扱い方次第で、人間性がまるで違ってきます。1つの逸話をご紹介します…。

《近所にそれ程大きくはないが、手入れの行き届いた庭を持つ家があった。植木も綺麗に手を加えられ、季節の花々がいつも、彩り鮮やかに咲き、道行く人の目を楽しませ、心を和ませていた。ある日突然、その家の主人が亡くなり、若い夫婦が2人、その家に住むようになった。それから数ヶ月、道行く人の目を楽しませていた庭は、みるみるうちに荒れ果て、無惨な姿になった。同じ庭がこうも変わってしまったのか、一種悲しいような思いで、その庭を道すがら、眺めている》と。

人間の心とはそれほど綺麗なものはありません。人間の心は自然に似ています。例えば、雑草は放っておいても瞬く間に繁茂します。しかし美しい

花は、水を与え、肥料をやり、虫を除け、丹精込めて育てなければ花は開きません。人間の心もそれと同じです。放っておくと雑草が生える。心の花を咲かせるためには、絶えず心を見張り、雑草を抜き取らなければなりません。二宮尊徳は「あらゆる荒廃は人間の心の荒蕪（こうぶ）から起こる」と言いました。心を荒れ放題にしないためには、日頃から心の田んぼ、つまり心田を耕さなければなりません。日々に、自分が生まれたルーツへの報恩感謝、ご先祖様を敬って合掌し、心を寄せたご供養が、心田を耕す何よりの行いだと感じ入ります。

お盆の「帰省」を契機に、自身の心を落ち着かせ、日頃の行いを振り返り、自分の生まれ育った土地・先祖・血縁を改めて省みる月に行ってみてはいかがでしょう？ 読者の皆さんが「心からの祈り」を捧げられますことを祈念して、今月号の筆を置くことに致します。

合掌 副住職 谷川寛敬